

【 15 】

氏 名	平 井 俊 彦 ひら い とし ひこ
学位の種類	経 済 学 博 士
学位記番号	論 経 博 第 6 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 12 月 22 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ロ ッ ク に お け る 人 間 と 社 会

論文調査委員 (主 査) 教 授 出 口 勇 蔵 教 授 岸 本 誠 二 郎 教 授 穂 積 文 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はイギリスの17世紀後半から18世紀初頭にいたる社会思想史をジョン・ロックとシャフツベリについて研究したものであって、全体の構成は以下の如くである。

まず序説においてこの研究の意義と課題とを概観し、第一章においてはロックの思想の第一期を代表する「自然法論」を分析し、第二章においてロックの経験哲学の構造を論じる。第三章においては、上の哲学的基盤の上で経済生活がいかに分析され、体系的にとらえられたかを論ずることによって、ロックの社会思想の根底を明らかにし、第四章においては、その上にきずかれる市民社会にたいするロックの見解が説かれる。最後の章においては、ロックの弟子であるシャフツベリの道徳哲学の概要を論ずることによって、全体として、イギリスの啓蒙思想における人間と社会とについての見解が体系的に明らかにされるのである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ジョン・ロックの思想の研究は、第二次大戦前後から新段階に入った。わが国においても、太田可夫、松下圭一、浜林正夫、羽鳥卓也の諸教授は新研究を発表し、ロックの著作の邦訳も多くを加えた。しかるに現在のロック研究にみられる一つの特色は、ロックが、人間把握と社会把握とにおいて異質的なものを混在させていたとする点である。すなわち、ロックの理論の中で、感覚ないし経験を重んじる部分と理性ないし合理性を強調する部分とが調和的に理解されていないために、人間や社会について、ロックが保守的な思想家になったり急進的な思想家になったりするのである。本論文の著者はこの傾向に満足せず、ロックの社会思想に統一的な解釈をあたえることを念願して、この研究をはじめた。

著者は一方でロックの「自然法論」(1664)と「人間悟性論」(1690)をくわしく分析して、ロックがデカルトの生得観念を否定するとともにホッブスの感覚論の一面性をも拡充し、かくして経験に即して合理的認識に到達するとされた悟性の本質をばあきらかにし、よってもって経験論的な啓蒙的人間の原型が作

られる過程をあきらかにする。他方において著者は、この人間像とロックの政治論とをむすびつける媒介を経済論の中に求めて、経済理論的分析にたずさわる。このような総合的な研究態度はこれまでのロックの経済学史的研究に欠けていたものであり、この欠陥をおぎなうこの研究は、社会思想史的研究が経済学史の研究にたいして与える貢献の一つであり、学界へのあたらしい寄与だと考えられる。ところが媒介項となるべきロックの経済論についても、二つの解釈がおこなわれている。一方ではかれを重商主義者とし、17世紀末の商業資本の立場に立つ学者とみ、他方では新興の資本主義的独立生産者の代表者、つまり古典経済学者の先行者と考える。この二種の解釈にたいしても、著者はそれらを統一する道を求める。著者は「利子・貨幣論」(1692)をとり上げ、そこにある理論をば「重商主義的貨幣循環理論」と名づける。重商主義者流に富を貨幣形態においてみるロックは、しかし、考察を流通過程にとどめず、さらに生産過程の中に入りこみ、「第一生産者層」とよぶ資本主義的耕作地主の生活を分析して、流通市場の商品の存在をたしかめ、その商品の流通から貨幣的富が形成される過程にいま一度かえろうとする。そのばあい、地代になぞらえられる利子の高さが貨幣循環の速度と範囲とに影響することに着眼し、貨幣流通量を大きくするためには、利子は現行よりも引下げられねばならぬと、主張した。これがロックの貨幣循環理論とその実践的結論であった。しかるに、利子引下げの方法について、ロックはJ・チャイルドと対立した。チャイルドは引下げは国家の権力の行使によって行なわるべしとしたにたいし、貨幣の生産力増加への役立ちを考察するロックは、引下げは生産力増加への寄与への力に応じうるように、つまり生産物市場の自然のなりゆきにしがって行なわるべきことを主張した。貨幣政策上のこの対立は、ロックがチャイルドよりも一歩古典学派にちかづいていることを証明している。そしてトーマス・マンとスミスとの二元的構造をもつとされる普通のロック解釈は、ヨリふかめられた分析を通して、過渡期的なあたらしい解釈によってとって代えられようとするのである。

以上のようにして、ロックの社会思想の統一的な解釈と歴史的意義とがあきらかになるとするのが、著者の達した結論である。

著者は最後の一章を、ロックの弟子であるシャフツベリの研究にあてている。これは原典から行なわれた、おそらくわが国でははじめての研究の一部がおさめられているのであって、詳細は著者の今後の研究にまつべきものと考えられる。

要するに、この論文は現在の我国に多く行なわれているロック研究の中にあっても、ロックの社会思想を歴史の流れの中で浮彫りにしようとする独創的な試みとして、相当に高い独自の価値をもっている。けれども、行論のあいだにままたま粗雑な表現があり、経済理論的な整理の仕方に十分でない点がみられることなどが欠点として指摘できるであろう。要するに本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。